

第九号

六月十四日發行

東大學生 獄中書簡集

ともかく
緊張感だけは失ないたくない
というその一点張りで
"肉体派" よろしく
どうやら四ヶ月すぎました。

曰 次

- 一、四月二十二日 東拘より…………… 河口あきら（横国大）…………… 一
二、四月二十六日 „ „ „ „ „ 河口あきら（„） „ „ „ „ „ 二
三、五月のある日 中野より…………… „ „ „ „ „ „ 三太郎（経斗委） „ „ „ „ „ „ 三
四、五月三十日 東拘より…………… „ „ „ „ „ „ 奥津久男（理共斗） „ „ „ „ „ „ 五
五、六月三日 小菅より…………… 吉崎健（仮名） „ „ „ „ „ „ 七
六、五月三十日 中野より…………… 東田洋一（弘前大） „ „ „ „ „ „ 八
七、五月三十一日 小菅より…………… 松浦兼一（仮名） „ „ „ „ „ „ 十一
八、六月五日 „ „ „ „ „ „ 林清隆（京大） „ „ „ „ „ „ 十三
九、五月十六日 中野より…………… 森村信喜（農共斗） „ „ „ „ „ „ 十四
十、五月六日 東拘より…………… 水上二六号 „ „ „ „ „ „ 十六
十一、救対通信 „ „ „ „ „ „ 情宣部 „ „ „ „ „ „ 十八

四月二十二日 東拘より

河口 あきら

「労働運動のすべてを賭けて」

七〇年の不退転の闘いが開始されようとしている。

獄舎の壁は厚いが、闘争の激の鋭い響きは伝わつてくる。

四月の末から日本階級斗争がむかえる激動は、自民党から小ブル的な学生サークルまで一挙に包み込み、歴史的選択を自己の政治組織の選択として、ブルには「生き方」の選択として迫るであろう。

レーニン主義的組織が、蓄積してきたすべての力量は、ここに至つて、まったく新しい地平へと突き進む力として以外には發揮しようもない。わずかなためらいが組織にとつては何年分もの蓄積をぼろ布と化し、権力はその弱みを見逃さはない。それ故、四、二八以後の闘いは不退転の一瞬の緩みもないままに転化するだろう。

アルジョワジーは重大な危機感を抱いている。彼ら政治委員会は「大学と沖縄」のどちらも決定的な得点のないまま四月二十八日をむかえなければならない。

「大学問題」は、坂田の怒号と喝にも関わらず、「十項目確認書」並の、又はそれより許しがたい「自治主義」を大学の責任者に植えつけた。教授たちは彼らなりに「安田講堂の斗い」の成果の上に自分の幻想を構築する。ただ彼らは、自分たちが憎悪する「暴力学生」に底で支えられていることを知らないのが、すべての悲喜劇の原因なのだが……。

自民党の中には坂田を更迭せよという公然化したという。いや、大學的秩序を示す如何なる行事も存在しえなくなつた。入学式や、毎日の講義さえ攻撃の目標になるのだ。

階級斗争がこうしたレベルで進められるとき、権力の手段は暴力以外なくなる。しかし権力の暴力行使は、政治的には誰も獲得できない。これが帝国主義段階における権力のアキレス筋となるのだ。そのためには、二つの面でわれわれは勝利しなければならない。

第一に、権力の暴力を実際的にはねのけること。その上に立つて政治宣伝に勝つこと。

第二に、積極的政治における防衛的要素を大衆化すること。

帝国主義段階における資本主義は、もはやすべての人民にとって耐え難いものと化している点。何一つ人民の現在的な課題を解決しえない。沖縄の「命を守る県民共闘」は如実にこの事情を示している。つまり、命を守る——命を賭して闘う、の展開は、唯一、帝国主義的現実のバク露とその否定の論理に支えられて始めて実現する。また、これらの「防衛的要素」こそが、眞の革命的決起を生むのであり、ロシア革命における人民の革命的行動ですらも「防衛的要素」に支えられる部分は少なくないのである。（ただ、スターリニストの場合、「防衛的要素」の表現は、日和見主義と反革命的武斗においてのみ有効性を発揮する。）

本多論文が「巨人族の斗い」の時代を予見するとき、僕は、

「党としての斗い」と「党のための斗い」が、現実的整一性をもつて開始されたと感じた。

巨人となる日は近い。

同志諸君／前進せよ！

以上は、同志けい子への檄文である。ただの直感みたいな部分もあるが、今后更に深められるだろう。

トロツキー三部作。

第三巻に進んで、反対派の国際的糾合を計つている部分。

スターリンの左右シグザグ路線の必然性の構造が少しつつわかつてくるが、この三部作はどうちみち不充分。

このあと、トロツキー「ロシア革命史」第二巻（これは途中で中座していた）を始める。トロツキーついでに、「わが生涯」をやつつけようと思う。僕の机の上か中にあるはずなので入れるよう計つて下さい。「下」をかつてください。

なお、机の上の薄紙のカバーのかかつた岩波新書若干は、まだ読んでいない本なのでおいおい入れるように母に言つて下さい。

今月の末から分離公判との斗争が開始されます。

共に頑張りましょ。

握手／＼

一九六九、四、二十二 あきら

P、S、他党派の主張が知りたい。

集会、デモ、駅頭、書店、知人、あらゆる機会を利用して集

め、社会新報、赤旗、戦旗、革命、解放、などなど入れて下さい。ブル新でも、激動期になれば、その主張、表現が、大きく違つてきます。何か（東大斗争関係又は何らかの報道）気のついた事があれば、切抜くなり、うつすなりして送つて下さい。

以上、多忙とは存じておりますが、創意的時間の活用にて実現されることを

四月二十六日 東拘より

河口 あきら

新聞は沖縄代表団の到着をつげ

お茶の水、水道橋、飯田橋近くの歩道敷石

は一枚残らずはがされ

人々はむき出しの泥と砂に足をとられ

機動隊は四人一組で首相官邸のまわりを

へめぐり、青ヘルメットの下の髪は汗にまみれ

日大生を追いかけて明大生までパクつた機動隊は

その責任をとわれ、明治大学当局はこれを告発し

法政大全共斗は本日から全学バリケードストリ

突入り、民青諸君は駅でビラを散き

裁判長は騒乱を起した二十一人を目前にして

気を動転させ、泡を吹き

政府は「大学紛争対策法案」に命をつなぎ

新たに幾多の大学を封鎖斗争に追い込み、

社会党は反戦と日共にはさまれてぐずぐずし

私鉄大手八社は彈呼全日ストをうち抜き

二十八日に向つてうたう……

「ソーラン（罪桐鳴）にはソーランをもつてこたえよ」

世界は加速度をつけて最期の瞬間……

ここがロドスだ ここでとべ……

へ向つて進行しているのが見える。

私には、更に多くの言葉とペンと紙が必要

なのです。

ユアーズ トルウリイ あきら

五月のある日、中野より

三太郎（経研委）

5・10集会は新聞発表でも三千人とか、統一公判要求、一切の権力による弾圧反対の声が、ひびきわたつた事と思う。ぼくも獄内で連帯の実践を行いつつ、外の諸君との連帯を感じた。「失うものは鉄鎖のみ、國家権力に対決する武器はただ団結のみ」まで「宣言」のおさらいをしているよう感じだが、全くそうとしか考えられない。もしたとえば救対との結合をたちきられたら、本当に、「やみ夜に一人」という感情になろう。

「権力」「階級」「弾圧」「團結」これらの言葉も、ぼくにとっては実践をとおしてはじめて肌にやきついたものとなるだろう。

所で「叛逆のバリケード」の差しいれありがとう。一気に一日でよんでもしまつた。なぜもつと早く十一月に、みなでよまなかつたのだろうかとくやまれる。東大内改良斗争から対東大斗争へとかたりつつも、貴族の特權分割斗争をのりこえねばとのあせりも充分に結実させられなかつたくやしさ。「叛バリ」は

本当に、おもしろい。「生きるとはなんだろうか」という問い合わせてくれる。詩もおもしろい、インターも、赤旗のいみもしらず、機動隊に拍手した日大生が、古田体制打倒の斗いの中で、自己を変革していく姿。「我々がプチブルからプロレタリアートに近づくにしたがろてマルクスも苦笑しながら、姿をあらわす」というような文章。これをよんでいると砂川斗争を思いだす。赤旗反対、もちこむなといつていた地元の人が、十数年后には、反戦青年委等とともに、「この侵略機をベトナムに送るな」「基地拡張阻止から基地撤去へ」と永続的に斗いつづけている姿。こうした事をみると「人は社会主義者としてうまれるのではない、社会主義者になるのだ（実践をとおして）」という事を感じる。「実践、実践のみが批判的思想をみちびきうる、何故ならそれはギマンを検出するからだ」というH・ルフエーブルの言葉にぼくは身をおき、予想される春村実践主義の批判も甘じてうけよう。

この東大斗争の中での批判的思考をみちびきだした人、出さなかつた人、出さなかつた典型は加藤一郎。彼は「確認書解説」というのを書き全国大学当局のかくれたベストセラーになつてゐるそうだね。全くわらつちやうよ。石田雄の「明治思想史研

究」に出てくる「教育勅語解説」井上哲次郎みたいなもんだ。制度の非近代性にすりかえた当人は、今度はその作文のよみ方までおしえてくれるとは。ありがたきしあわせ。それに花をそえる民青は、解釈斗争をやるんだつて？現実の矛盾をいかに止揚するか、それにむけていかに実践するか、その斗いの上部構造的表現として「法」があるのであって、それが自立するなどと信じこんだらもうどうしようもないね。それにくらべて何かをひきだした人としては折原教官があげられる。何のかんのといつても九月のスト突入は折原の「理性の府大学をとりもどそう」「非理性的教官に反省を求めよう」ではじまつたのだ。問題は、そこではなくて、実は、現在、折原氏がたどりついた地點に、二百四名のうち何名がたどりついたかという事だ。3・10集会後の折原氏は、たしかに変化している。それは二点、一つは、言語表現の力と暴力行使という二元論それは知性と暴力という二元論を克服しはじめたという事だ。既に、黙殺暴力、無関心暴力という言葉（一世を風びしたが）自体は、学生支配の中にふくまれる暴力性（強制力）をみつけだしているが（福田なる人物は、これは言葉にならぬ言葉だという。言葉の解釈使用についても独占し管理しているとはさすが東京帝大教授だけある）、青医連の運動に対する弾圧に何をもつて対するか、言語表現への固執は、「理性」の物神化であり、理性の公認の祭司たる教官特権への安住である。そういう限りブルジョワ社会のタブーの一歩手前によまつている。この学問、理性とは実は、現実の階級社会の矛盾の反映であり、学問に「批判性」

があるのではなくて、現実社会に止揚すべき矛盾があるのであって、矛盾の現実的止揚に一步ふみだすとタブーをやぶつてくれる。そうなれば、ブル新評論家の「目的はいいが手段が……」「やはり民主社会のルールを守つて」という三元論が実はプロレタリア人民を「武装解除」し、小羊のむれにしてしまうものだという事に注目せざるをえなくなる。第二に一と関連して、教官の傍観者の中立的認識への最終的批判である。東大ではばをきかず「学問のための学問」論は経済学部もありで、大内教官にもみられる。彼の場合「日共の党綱領解説」経済学への批判が、科学と哲学の切斷（実は切れっこないのだが頭の中できれいさっぱり切りはなす）をうみ、それは「学問のための学問」主義となる。それが学問の自立への幻想とむすびつくと、やすやすと学問のための場（大学における既得権維持とむすびつき、大学秩序を守る事が、すべてとなつてしまふのである。

さてこうした認識態度に欠落しているのは、「世界内存在としての自己」としての了解である。何をまちがえたか、絶対者の高みにいると頭の中で考へてしまつてはいる。自己の存在と、行為のいみが全くわからないのだ。

これに対するぼくらの斗いは、限界はある、自己が、現在の社会の管理、技術労働者として、のみこまれ一そのうちに支配者の犬番へと順応していく事への拒絶をもふくんでいたと思う。そうであるが故に、大学アカデミズムの抑圧的要素をみぬき、そのぎまんをあべきだしたのだ。こうした斗いの火は、法曹界

のヤングパワーにもとび火しているようだ。「近代の裁判官は自動販売機のようなもので、手数料とともに訴状をなげこむと

法典から機械的に演えきされる判決理由をはぎだしてくれる

M・ウェーバー」という形式合理主義のつらぬきとおされる法律家にはめこまれ、自己が全く、そうした自動人形となつてしまふ事に対する反逆の火の手。ここでも日共は落葉反対であり「みんなそろつて法律家になりましよう」にとどまつているようだ。ここにとどまる限りはこわくない。許しうるようだ。

「法の自立の幻想、形式合理性を通じて貫徹される支配」に気づきはじめるや、許しえない事になるだろう。学生の運動も同じ、「名大はあまり民主的だから民主化する必要がない」という人間が八幡の労務課へスルッと入つてしまつてどうも感じない、というのなら大学自治は万万才だ。「理性」の祭司にとどまる事から来る腐敗を拒絶し、社会全体のゆがみに眼をひらいだ時、そして普遍的、人民的斗いにのりだした時、「世間なみの弾圧(?)」もくるというものだ。展望四月号の座談会で高校の教師がいつていたように『大学の斗いは「教官は、国家、社会の要請ではないといつてゐるが、結局、資本のため国家のためじやないかウソつくな」だが我々に對して相手は「資本のため、國家のためにやるのだ、文句あるか』だ、その時に、どう斗いつづけるか永続的に』といつてゐるが、それこそが我々の問題だ、いかに青年の斗いでなく持続するか、……(次回につづく)

◎ 手紙出してくれないか、みなのはしきなつたから

東拘にて

奥津 久男(理共斗)

前半省略

さて真崎君、前回の僕の手紙が民青のテロ禍の中で失なわれてしまつたとの報が、水茎の跡も鮮やかな女文字(?)で来たと思つたらすぐには大丈夫であつたとの報が続いてきました。全く鮮やかな影分身の術を用いるものですね。さて、いろいろ述べたい事があつても時間は限られているので今回は二、三點について書きます。

○ 朝七、〇〇起床、スリ切れたオルゴールの間伸びした白鳥の湖そして若干の音楽のあと七、一〇から「ワンツー、ワンツー、それつ／＼…… 水前寺清子の、今日も一日どーんと行こう！」なる放送が五分間、全くブルジョワ日本の貧弱さ、卑俗さに吐き気が出る。ブルジョワ法体系の「裁きの場」に連行されるまで身柄を拘置され、判決の執行と証拠保金の為と称して、社会的に抹殺されるこの身に対し、「心静かに裁きの日を待て！」とされているこの身に對して、それを執行していく当の支配者どもは我々をどんな文化に浴させてくれるのかと思つたらこのザマだ。資本制日本のこの浅バクさ、大いに冷笑してやろうではないか。

○ 二十七日より強行されつつある第一回分割公判、獄中の我々にはラジオ、新聞共、その報道は陰ペイされているが、金嬌老方式で抵抗を貫徹する僕の決意は白熱のごとく燃えていく、

シユブレコール、インター、連帶の拍手が獄舎をゆるがし、醜惡なる圧殺者、採圧者の手先どもをウロたえ右往左往せしめ、

目を射るようアザヤかに基本的な対立関係を浮かびあがらせる、いつの日か、この灰色の壁は、人間解放の為に闘うプロレタリア戦士の生を圧殺するための壁から、解き放たれ、戦士を圧殺してきた者達、彼等を獄舎にブチ込んできた者達をブチ込むための獄にされ自身、自己転変せねばならないのだ。

○ プロレタリア統一戦線の一翼へと身を連らねる決意の下過去の自分自身に対して、自分の家族とりわけ母に対して「帝国の忠良なる臣民」破滅を「破滅の中から生を！」と激しく断絶を叫んでいる仲間へ、やはり黒インキで氏名が塗りつぶされているが故に君が誰れなのか僕には特定しえない（またこの僕の氏名も塗りつぶされて特定されえないだろう）だが、君は僕そのものであり、人間そのものとして生きようとしている者なのだという事は明らかだ。そうなのだ、まさしく物狂おしいほど激しさをもつて断絶を突きつけねばならない。過去の自分はあまりにも卑小だから、現在及び未来につながる自分は余りにも巨大なそして宏大な道を歩むべき宿命を負うようになつたのだから、およそ世界がこれまでとは全く異なるようみえるような自己自身の転回点の只中で、人は激烈な断絶への衝動に駆られないということがありうるだろうか、まさしく君にとって自分を表現するためには「これしかない、これ以外にない」のだ。それでいいのだ、人間らしく生きんと欲した僕自身にもそうした転回点はあつたし、また常にそこに還帰しつづけ

けるのだ、未来永劫に、そしてそうした転回点を経ないもの達の運動のはかなさよ。

だが僕はただ一つだけ付け加えたい。「しかし、この新しい現実は、まだ生まれたばかりだという事では、完全な現実ではない。それはまだ生まれたばかりの赤ん坊と同じく只の概念そのものでしかない。建物はその基礎ができたからといって、まだ、できあがつたとはいえない」（ヘーゲル、精神現象学、緒説）、まだ純粹に抽象的な概念そのもの、（それ故にこそ自己を物狂おしいほど激しく突き動かすのだ）、それは現実の荒波の中で弄はれ自己自身でなくなつていくその広がりと深さの度合いに応じて豊かな具体的普遍たりうるのだ。未來なき出口を持たぬ階級、小ブルジョワがかい間見たプロレタリアー

トの限りなく偉大な巨姿へ心臓と頭脳を共に結びつけうるためには、長い道を歩まねばならない。労働者階級の階級的政治的独立の達成（階級形成と党建設と統一戦線）、ブルジョア権力の打倒とプロレタリア独裁の樹立、を契機とした資本と質労働の両極の両極ながらの廃棄、階級としての自己の止揚、といふ永続革命の過程（人類前史）と共に、現在的に歩まねばならないのだ。その中で、どれほど苦悩に満ち満ちた自己喪失、自己回復の道を小ブルジョワは経なければならないのだろうか。君にとつても、そしてこの僕にとつてもまさしく斗いは今始まつたばかりなのだ。我々はどれだけ多くの事をこれから学んで行かねばならないことか。その中でもとりわけ、君が現在「帝国の忠良なる臣民共！」と激しく断絶を突きつけていたる

庶民

達から無限に我々は学ばねばならないという事は「実践」というもののそのものが鉄の力をもつて我々に押しつけるだろう、現実を直視する勇氣と知性を有する者ならすぐにその事は理解しうるだろう、その中で自己の抽象性を否定し具体的となつて行かねばならないのだ。とも角、現実の総括の中からしか人は成長しえない。

物狂おしい激情の中でも、一輪の花を見つける余裕を。『帝国の忠良なる臣民』そのものはプロレタリア統一戦線の力によつて爆破され、自己転変の道を歩まねばならない宿命にある、（さもなくば、ファシズムにより上から自己転回を強要され死の道を歩むのみ）、だが見よう『帝国の忠良なる臣民たち』の中にある健全さを。『庶民』の中にある、粘り強く生きている生きつづいている健康な感性を。実にこの中に無限の可能性があるのではないだろうか。

さもあらばあれ、斗いの中で共に討託し共に意志を共通の目的のもとにうち固めて共に前進するのみ、獄中の被告人諸君、共に斗わん！

六月三日小菅より

▲遠吠え▼

吉原 健治

「大日本帝国」なんて知らないよ
「60年安保」なんて知らないぞ

いっぱいの言葉

立つた「男」は冬の立枯れの木

いっぱいに教えられて いっぱい憧れて

涙をためて見た 時の行進

いっぱいいつまつたカバン

いっぱいいつまつた電車

生ぬるい視線にへばりついた女の子

私、あなたのお友達になりたいわ

ああ、この売女め

僕は友達が欲しいんだ

どうして僕を抱いてくれないんだ

みんな みんな くたばつちまえ

己の性にしがみついて

墓さえ満足に壊れない人々

思い出せない秋が過ぎさつた

10月の夜

やつとデモつて

家へ帰つて泣いてしまつた

忘れていた秋がやつて來た

10月の風

陰部を一片の雪の葉ぐすら隠せぬ金裸の「男」
そんな「男」のおどおどした門出

性の棒磁石をひきずつて

むつとした草むらを

穴にうもれた血を求めて

なんでもない秋がやつて來た

10月の朝

鉛の日ざしがとつても苦い

ひきずつてきたアジが部屋いつはい

わからない秋が来ようとしている

いっぱいの視線 いっぱいの銃口

弾の描く軌跡とまかれたガスの領域

ズシツと僕も含まれた

一滴のくやし涙

一月の立枯れのイチヨウに血涙に溺れた言葉がまわり

つく

日本帝国主義を打倒するぞ♪

真崎殿

追伸

こんなものを書いたのは初めてで、読みづらいだろうと思いました。『5・21拡大編集会設総括と今後の方針』の断固とした決意を拝見して連帶のハ遠吠えをお届けします。なお「獄中書簡集」は第一、二号、第六、七合併号しか受け取つていません。

封鎖 占拠 バリケード

みんなみじめだ

それに意味を与えるなど

なおさらみじめだ

しかし

意味を附させないではおかせない状況は

いつそうみじめだ

中野刑務所にて

東田 洋一

前略

度々の接見及び差し入れどうもありがとうございました。

『六法』は公判の前日の夕方はいり、久し振りに『一夜漬』の氣分を味うことができました。もつとも消灯九時ですから、刑訴法・刑法・憲法にさつと目を通したのみでしたけれど。あの『六法』ここに置いていいですか？それから、その日、裁判長よりの『出廷勧告』なるものが届きました。新聞報道によると「祈るような気持で出した」とあつたのでちよつと興味をもつて読みましたら、何のことはない、態のいい脅迫といつたものでした。

ちよつと団々しくなつて恐縮ですが、ひとつゼイタクなお願いがあります。最今よく『美術全集』とか銘をうつて名画集の類が発行されているでしょう。もし、あなたかあるいはあなたのお友達がそういうのをお持ちでしたら、暫く貸して頂けませ

んか。尚傷つく恐れがありますので、あまり立派なのは困ります
すけど……実は、ぼくは『死』というものがあまり好きにな
なれません、で生花をいれて頂くのはとても有難いのですが、
あれは時間がたつと枯れてしましますから、ちょっとアワレミ
の情を起すのですね。それに、獄中生活というのは、どうして
も思考が抽象的にならざるを得ませんし、この際、『上部構造』
にできるだけ触れておくのも、と考えた次第です。尚、これは、
あくまでゼイタクなお願いですから、その点を押しておきます。
手にはいらなければ、その旨お伝え下さい。

小菅のO氏の問題提起は、非常に大切な問題だと思います。
でも、今のぼくにはその問題に答えることができません。ぼく
が、今『早期戦線復帰』を第一義としたら、O氏の問題意識よ
り一つ低次元の『復帰』に終るようと思えるからです。実はO
氏と同じ日に、ぼくもハン・ストにはいつたのですが（単に感
情的な動機から）、『外』の人いさめられた形で中絶しまし
た。そして、今は状況に埋没している自己を見出することはさほ
ど困難なことではありません。唯、今のぼくにとつて、何年で
も獄中で闘うという決意をすることが、より意味深いという状
況に自己が位置していることを、卒直に認めざるを得ません。
それも、O氏の問題提起を黙過することなく、です。

『統一公判』をカチトルということを自己の至上命令とした
時、その時初めて、ぼくと眞の『東大闘争』との係わり合いが
始つたことを意識しました。多分、解放講堂にはいることは第
三者的存在にもできたと思うのです、実例が深くですから。そ

して起訴されてからも、ぼくの内部にあつたのは『部外者意識』
なのです。ぼくは結局、当初『東大闘争』に係わつたのは、個
人的、実存的な意味での自己だつたと思うのです。その観点か
らは『統一公判』を聞えないことを四月・五月の独房生活で痛
感しました。社会総体に対するアンチとしての『東大闘争』、
その『東大闘争』との出会いは、ぼく自身が社会総体に対する
アンチとしての存在を獲得しない限り不可能であると思うので
す。

体制に浸りきつた肉親とのぼくの対応、これはつまり自己の
プチブル性との闘いだつたのです。最初はそれに気がつきませ
んでした。体制内的存在との『和合』もあり得ると思つていた
のです。今、依然としてぼくは自己のプチブル性との闘いの毎
日です。変つたことといえば、そんな『和合』はあり得ないこ
とに気がついた事位のものでしよう。『統一公判』へ眼を定め
ることによつて初めて、ぼくは『東大闘争』の『質』を垣間見
ることができたのです。どこ迄やれるか分りませんが、状況を
甘受していながらも、ぼくの眼の前にある壁は、物理的存在と
しての國家権力であり、現体制を底辺で支えている壁であるこ
とは忘れる事はないでしょう。

ある人々に言わせれば『輕卒』といつて済まされるであろう
ような、ぼく自身の一、一八・一九闘争は極めて自然発生的で
した。そしてその後いろんな人々と話したり、あるいは読んだ
りしました、『東大闘争』について。そして全体としての一、
一八・一九闘争も自然発生性に依拠することが大であつたよう

れ想ひます。結果として、あの闘争は非常に大きなものとなつたし、弾圧も大きなものになりました。でも、その結果（成果）だけを取りあげて美化してしまうことは慎しまねばならないと思ひます。一、一八・一九闘争の主体的意義づけが不充分ではなかつたか？ この疑問は、ぼく個人についてはストレートにあてはまります。が東大全共闘、あるいは諸潮流はどうだつたのか、ぼくには厳しく総括する余地はあるようと思われます。日共の「ブルジョアジーが眞に恐れているのは日共だ」という自己の正当性の主張は、それなりの意味をもつてゐるかもしれません。が、それが全てである筈はありません。ぼく（たち）も、弾圧の強さのみによつて「成果」を並べたてることは許されないでしよう。皮肉にも、ぼくは、起訴状の粗雑さ、裁判所の論理のデータメサによつて、自己の客観的位置を知る手掛かりを与えられたのですが。

下らんおしやべりになつたかもしません。それに乱筆亂文をお許し下さい。

ではきょうはこれまで。御健斗を祈ります。

一九六九・五・三〇（独房生活一〇〇日目）

五月三十一日 小菅より

松浦兼一

拝啓

白色テロルにもめげず、民青のリンチにもめげず、かつ又、日々襲いくる挫折感にもめげず奮斗中の諸君に獄中より固い連帶と友愛をこめて。

救対活動にたずさわつておられる諸君、本当に御苦労様です。

(+) ノンセクト・ラジカルの諸君について

けなげなまでに自己を信じ自己に忠実であろうとする諸君、諸君は何故にノンセクトであり続けることをやめようとはしないのか。諸君の行動の原点は何か? 自由意志を尊重することなのだろうか? 自由意志結構!! ところですべての斗争主体の自由意志を尊重したならば——つまり、現在の全共斗(東大・日大)——その運動体はどこまで斗争を担いきれるだろうか? ぼくはそれが非常に気にかかります。現状で、東大斗争にしろ日大斗争にしろ、斗争をより高い次元に止揚できますかな?

言うまでもないことだが、自由集団(アナキスト集団)といつてもよい)の最大の欠点は組織論と戦略論の致命的な欠如です。自由集団にバリコミニーンはやれてもロシア革命がやれない理由はまさに彼らがてんてばらばらな自由集団だからです。ノンセクトの諸君は現在の学園斗争のしゆんじゆんをどう打開するつもりですか? まさか、これで空中分解というわけでもありますまい。誰だつたか、今井君でしたか、全共斗連合の形成を

アツピールしていまましたが、しかしそれは一時しのぎにはなつても、再び厚い壁にぶつかることは必至のようです。なぜかと云ふと、全共斗運動をノンセクトの諸君が主導権を握っている限り打開しえない次元の問題だからです。

個別全共斗から全共斗連合への移行は、単に個別教育資本から資本主義総体へという具合に、部分から全体に移行したにすぎない。これでは全共斗の体質が現状のままである限り、再びスケールの大きい壁にぶつかることは避けられないようと思われます。ノンセクトの諸君は何故ノンセクトであり続けようとするのか。既存セクトにアレルギーを感じているからなのだろうか。それとも組織一般にアレルギーを感じているからなのだろうか。前者ならば、全共斗にもまだ展望があるというものですが、なぜなら既存セクトとは別の組織をつくればよろしいから。それが東大全共斗という政治組織であろうと日大全共斗という政治組織であろうと、又全共斗連合という政治組織であろうとかまわない。だが現在のままの全共斗では一、一八、一九が限界ではなかろうか、と思われる。

さて後者の場合だが、実はこういつた諸君こそ先に言つた自由集団を愛する諸君なのでしようが、彼らの意識の裏返しは、ナルシス的な前衛意識であると思われる。これは直感で、なんら論理化しえず残念ですが、ま、いざれ論理化することでしよう。

ところでどうでしようかな、ここで『獄中書簡集』を舞台に『ノンセクトと階級斗争』をテーマに論争をやつてみては。

これは提案です。中々意義深いと思ひますよ。論者に制限はなし、です。

いつでしたか、「獄中書簡集」に家族論を若干展開していた学友がいましたが、あれには感銘を受けました。しかし僕なら帝国臣民である僕の両親につばをはきかけたりはしないですね。感情的な悔懲で事を処理しようとしても何ら解決はありませんよ。僕はつばをはきかけるよりもむしろ諸悪の根源（？）である『家族』をこのブルジョア社会内で能う限り解体するよう努力します。しかしここで確認しておかなければならないのは、「家族解体」がプロレタリア革命に先行すると、ことは極めてやつかいになるということです。「家族解体」→「社会変革」はノンセクトの論理であり我々のなすべき論理ではないでしょ

（二）運動外におられる諸君へ

現存の秩序から一步でも未知の世界へ足を踏み入れようとするときには勇気が要るのは必然であります。しかしその勇気なしには何ものも進歩しないのだということを思い起こしてもらいたいのです。僕は三派全学連のはしくれですが、僕も彼らと同じ行動をとろうとした時、少なからざる勇気がいりました。清水の舞台から飛び降りたような気持ちで、と言えば少々大きさですが、しかし可成り考えました。で僕は清水の舞台からとび降りて今は後悔しておりません。

「感激する」ということは極めて純粹な人間精神の発露です。

例えは、あの一・一八・一九の安田講堂防衛戦にてテノンで統てしまつては自分を裏切ることになります。「感激」の根源を究明し、それを論理化する仕事が待つてゐるはずです。で、それをある程度論理化したなら、あとは行動に移すのみです。

旧三派全学連や全共斗のようなラディカルな運動から、ペ平連のような市民運動に至るまで。まず自分の行動しやすい運動体に参加することが無難でしょう。そしてその中で自分の現存在をさらに対象化し、その運動体にあきたらなく思うようになつたら別の運動体に移ることです。自分の希望の場がなければ自分自身でつくるまでです。

僕は現在の旧三派全学連の運動形態や全共斗の運動形態が一番よろしいと思つてゐるのですが、それはあくまで現在の心境で、いつザビインコフにあやかりたいと思うようになるかもしれません。とにかく明日の風は明日吹くといつた流れものの心境です。（蛇足）

我々は口から生まれたのではありません。批評家でらするのは醜態ですからよしめた方がよいでしょう。無責任な連中にはただ軽蔑あるのみです。たいこ持ちのやることを一々気にしていたら何もできなくなつてしまします。又、不充分な論議からはも生れません。ただ周到に計画された（それは個人に限つてもよいことなのです。）行動からこそ何かが生れるのだというふことを記憶しておいて下さい。いつの日か、共に敵階級を相手に斗かいたいのです。思いつくままに述べてみました。

六月五日 小菅より

林 清 隆

はじめて手紙します。『獄中書簡集』三・六・七号入つてます、ダークブルー、ライトブルー、赤、橙の表紙の色彩がこんなところでは楽しいものです。刑務所は、「赤い」服は黙目といつたように色彩までをも奪う『灰色の世界』ですから。

獄中にいる我々にとつて手紙は、検閲という非合法のもとではあつても、斗争を継続してゆく重要な手段です。友人に出した何の変哲もない短い手紙でも「アジられる」とおびただしい」と友人は返信してくれています。獄の内と外という立場が一種の落差となりエネルギーとなるなら我々は嬉んでその落差を利かしよ。編集後記に「本当のアジを我々は求めている」とあるが、どんどん「言葉を奪つ」てほしいし、逆にアジつてもほしいものだ。獄にいる同志諸君、手紙をどんどん書き外との連帯を深め、自らを組織化していくのではないか。最近は検閲で黒くぬりつぶされた部分が多くなつてきていて、文章全体から、誰が書いたのか分る同志もいることと思う。

獄中書簡集を読んでも感じるのは、同じ環境にいる人間は同じ様なことを考えるということです。特に刑務所は『環境』が均質化している点では徹底した平等主義者なのですから。僅かな体操時間にナワとびとエキスパンダーで体を鍛え、机に向つて斗うべきか、安田講堂で斗うかはやはり一つの決意を裏したのです。しかし我々はもはや「学生」である時代ではないし、まして○×大学学生でもありえない。

我々にとつて解放講堂の場所は偶然的かつ一つの戦場でしつつは理論學習しながら、『保証』によつてこの勉強時間が奪われるのはないかと考へてみたり、壁に向つては國家権力にかなかつた。我々は学生でもなし、○×△□といふ名前をもつてゐる。

対する憎悪、革命のバトンを繋結させていく………
一日中全く陽の当らない孤窓の内の小さな倉庫、それだけに我々の憎悪と情熱は発散することなく深く深く沈潜し、蓄積され、将来の爆発へ。中世の城のような刑務所、その厚い壁の中をシユブレヒコードがひびき渡り、壁をうち抗議する同志の魂は地下からのとどろきのようだ。獄中書簡集にもそのとどろきは脈々としていて、我々の目に見えぬ熱い連帯を再確認させてくれる。

た人間でもない。編集の真崎君が『影丸』と名のつているように、我々は影一族として斗つたし、今后も影丸であるだろう。

「影」とは、いつも離れぬ、いつも人民にピッタリとついているということ、人民の姿そのものであり、人民の心を直接反映するということ、そして抑圧する権力に對して不気味に迫つていくといふほどの意味をもつ。白土三平のマンガが大抵オオカミ、シカ、ウサギなどの弱肉強食の自然描写から始まり、農村風景へ移つていき、歴史の舞台が登場することは大きな意味をもつ。影丸は歴史の必然である。影丸はどこから生れたかは

説明されない。歴史の創造物なのである。影丸は軍人であり、インテリアであり、煽動家であり、無類の強さもつ幻の革命家である。権力は影をおそれ、影丸を捕えては、おそれるあまり首をひきちぎり、手足をひきちぎる。だが影丸は又どこからともなく現れる。影一族は人民の不抜の前衛なのだ。

我々は大学も家族も個をも捨て、影となり、最後の権力、体制を打倒するための一戦場として講堂に籠つた。

東大全共斗と『外人部隊』同じスローガンを掲げてはいても革命の視点から大学を視ているのと、大学斗争から革命へと展望しているとの質的差異は依然としてあるのではないだろうか。これはもちろん僕達が主体的にうけとるべき問題だが、こんな点にも書簡集中、地方の部分が書きにくいというばくぜんとしたものがあるのでないか。

雑感として思いつくまま以上書きましたが最後に一つ。検閲が厳しいので、機関紙にのつてゐる斗争日を消すところまでい

つてゐるのですが、この検閲に対する抗議を起こしたいと思つています。この検閲も間の抜けたもので、ラジオで聞いて知つてゐるのにそれを消したり、見出しの斗争日を消して本文中の者は残してあつたりしてまつたくこつけいなのですが、やはり我々は耐えられない。僕自身今まで手紙を三回削らされている。できれば救対の方でこの検閲の法的根拠と、よい斗争方法があれば教えてほしいのだが。

五・三一愛知訪米阻止にはハンストが斗われた。

六・九・十一ASPACを全力紛砕せよ、

共に連帯する！

一九六九・六・五 小菅刑務所にて

五月十六日中野より

森 村 隆 秋

この手紙のつく頃には、きっと『狩野——石井』の選挙勝利が実現しているだろと確信しています。いつもながら、学部の諸君の救対活動には心励まされます。殊に全共闘の中でも農共闘が依然、健在で（勿論その質は常に問われますが）教授追及集会etc.張切つてることを聞いて心強く思つてゐます。今日は最近の僕の心境をざつとばらんにお伝えすることで報告にかえたいと思います。

僕の一日。朝の配られてくる新聞の社会面が半分位、まつ黒に塗りつぶされてゐることに非常なる屈辱感を覚え、怒りの発

散場所が失われていて、それが内向し、徒らに水洗便所の取手をガチャガチャ上下させる。昼間。三十分の運動。文字通り狭い「オリ」の運動場の中で繩飛びやショート・ダンシングを繰り返し、胸のむかつきを抑えながら、汗の額を初夏の太陽光線の中につき出し、むさぼるよう青い空を見上げるのだが、あの独房に漂う吐き氣するようなよどんだ灰色の氣流は僕の肺臓の遇々まで沈殿しきつていて、強大な目に見えぬ（権力）の看守の声は、いらだたしいまでに、強大な目に見えぬ（権力）のそれだ。

加藤さんは、火葬場の死体焼場を見たことがありますか？

丁度、そんな感じの小さな白い扉の列が長いコンクリートの廊下の両側に並んでおり、我が房は一番奥の右手にある。この長い扉の列が目に入る毎に、ひよつとしたら一生ここで過すんじやないかしらん、という実感信仰の悪魔の顔がのぞいたりする。房に入る。水道・トイレ（共に机・椅子兼用）付の一畳半。誰が考えたのか知らん、正に天才的な（！）設計にたよる極度に抽象的な生活空間。五感の正常な機能を抑圧され、ぎりぎりまで感性の磨滅を強いられ▲社会的死▼を宣告された者の抵抗が他ならぬ巨大な（権力）のふところの中で今や始まろうとしている。

夜。ラジオからはシュー・ベルツの「風」や「山谷ブルース」が流れている。こんなにも黒い（政治）の中にズブズブにひたりながら、未だ（政治）そのものになりきれぬ自分の分裂した姿を見つめつつ、夢の世界へ。

「獄中書簡集」等、読んでいて、同じ境遇の輩の精神のハッツラツさに時に面喰うこともありますが、僕の気持にしつくりくるものは少いようです。周期的に襲つてくる消耗感を迎える度毎に、自己の対象化能力の貧弱なことに泣かされますが、ともかく緊張感だけは失いたくない、というそれ一点張りで「肉体派」よろしくどうやら四ヶ月すぎました。

「斗い」は僕達をどれだけ鋭く迫まりえたでしょうか？それは「斗い」の対象にどれだけ鋭く迫まりえたでしょうか？それは同義反復ですが、現在、様々な形で問題提供されているようですね。「自己否定の論理」「内なる東大の破壊」等々……

しかし「自己否定」と口で云うのは簡単ですが、それも、いかなる内容の自己をさしているのか、否定するとは具体的にどういうことか、という問い合わせ抜きには無意味でしようし、若干アーチキテイツクに使われているのも気になります。現在の情況が具体的につかめていないので何とも云えませんが、共斗会議運動の再編の問題は、極めて重要なことのように思えます。即ち、単なる個人参加制の寄り合いジョタイン過ぎぬのか、あるいはより普遍的な團結内容を持つた運動体なのか、即ち、より明確な目的意識性を持つた指導性の問題を大衆運動との関連です。ここにおいては、革命化ということと大衆化ということが対立してはならないと思します。非常に大ざっぱですが、同じことが農共斗運にも云えると思います。単なる反民青集団という自然発生性から、どれだけ成長しえたのか？ということ。僕は東大斗争の切り開いた一つの歴史的地平を例えれば次の言葉に

託しておきましょう。

「社会運動は政治運動を拒否するなどと考えてはならない。」

同時に、社会運動でもないような政治運動は断じて存在しない」
(哲学の貧困) 「自己活動」という外観の下に一見「自由」を獲得しているかに見えるが、しかし、このブルジョワ的秩序をその根底に於いて支えているのが他ならぬ我々の「自己活動」であり「社会性」である。市民社会秩序の過々にまで魔の手を伸ばしている「資本の社会的権力」と実践的に対決していく限り於いてのみ、我々の新たなる社会性獲得の場(団結、共同体による秩序付け)がえられる。その過程に於いて、僕は坂本さんが提起した「場に於ける緊張の論理」を考えてゆきたいと思う。戦後の思想史――近代合理主義(丸山 etc.)、プラグラマチズム etc.――を検討してゆく中から、「平和と民主主義」の虚妄を真に実践的に止揚する論理を再度追求しようではありますか? どうも舌足らずのようなことばかり書きました。立看には不向きのようです。最後に最近の怠惰な自分に対する自戒の意をこめて、

「戦いか然らずんば死・血みどろの闘争か然らずんば無。問題は敵としてこのように提起されている。ショルジユ・サンド」

五月六日東拘より

水上 26 号

前略
小生のこの間の対応、要するに未だ「特別利害」を免れてい

ないということを明らかにするのみだ。まあ「世界史的規模の視野」のもとに衆智を集めて善処してくれたまえ。

ところで、この間、しばらくロゴスの世界をのみ徘徊していたので何だかあたまの中がバサバサに乾いてしまつたみたいだ。画集・写真集・書簡集等で、これはと思うものがあつたら、貸してくれないか。画集は誰れでもよい。写真集は海・山のもの動物・花・書簡集は芸術家のものなど、適当に。

―― ところでここのこところ、一日中ラジオが鳴つていて、うるさくてかなわぬ。多くは低俗番組で聞くにたえないものだ。人間の荒廃を見る思いだ。最終的に明らかになつたことは現在のぼくは、いわゆるクラシック音楽を好みない。あのもつたぶつて取りすました齊合した「世界」と一部の「才能」とやらに音楽が集中していて、我々からそれらが奪われている「奇型」の「実証」を見るおもいで、鳥肌がたつ思いだ。もつとも生の楽器の音のさわやかさ、美しさにはメをつぶるものではないが。レコードによるもの、それをラジオを通してきくなどは、どうもね。マルクスが音楽の美に対する感覚などといつての場合、「レコード」音楽などを言つているのだろうか。疑問に思う。変な言い方かも知れないがクラシックなどに「俗悪」というイメージが付着してしまうようだ。

スノビズムというやつ。マリファンアをやつしている黒人が、テナーサックスやアルトサックスのスローのアド・リブで延々とつないで汗みずしてやつてあるああいう世界が好きだ。ギリギリの(表現)行為なんだなという共感。

G・ポールドワインは『Another Country』の中で主人公、ジャズ・ブレイヤー（シンガーラ）の黒人青年ルーファスを小説の冒頭で自殺させているけど、そこからしか始められない彼の気持がよくわかる。

現実はあまりにも暗く、人間はあまりにも遠い。要するに「重圧を感じる感受性と感じることの少ない感受性があるにすぎない」なんて乱暴なことを言い切るつもりはないけど、「そういう断定にも一面の真理がないわけじゃないようだ。

ルーファスの妹のペティ（？）とかが、何かの理由で消耗したのにつけこんで関係をもつたような立場のイタリア人（？社会階級位の低い白人）の言葉が「結婚して静かにくらそう。僕の家族にも会わせよう」と言つたら、彼女が俄然、怒りだして私たち黒人が人間であるかどうかわからぬケダモノどもなんかまつぶらごめん。そもそもヤツラはケモノ小屋にいるのがもつともふざわしい人で、人間の世界に顔を出すなどは何かの間違いだ。（要旨）と相手の男をどなりつける場面がある。

僕も日々同じような種類の苦痛を感受せざるを得ない。ただ僕らは、絶望して金門橋から身を投げたルーファスや、アメリカにいたたまれずヨーロッパに逃げ、シリーリー島あたりをさまよつたポールドワインの世代の人間ではなく、「武装」してたち上つたブラック・パンサーズの同時代の人間（はたして、そうちか？そのことに耐えられるか？）などしがいがあるだけのようだ。「同時代人」などといふのはおこがましいかも知れない、ただ身を投げても何もないけれどもがち鬱うながに、何か

があるのではないかと無理にも希望という名のカンフルを射つてゐるだけかも知れない。われわれは、このままでは「生きられない」から闘う。「ただ生き生きと生きたいから闘う。」まとこと「展望など」というものは、我々が切り拓くものとしか、ありえない。」闘う以外に何も残されていないから、起ち上がる。

相互の競争にかかるに革命的な團結をもつてせよ／そのとおりでしよう。されど人間はあまりにも遠し。権力の壁が厚いなんて言つてゐるんじゃない。「匿名」の権力を「有名」の個人に解体するのを妨げる「小市民」や「俗物」どもが充満していく、どうも息苦しいと言つてゐるに過ぎない。

さあ、みなさん、無理にも踊りを踊りましょう。リズムをとつて、アン・ドウ・トロア――。伴奏は何がよろしいでしょうか。軽快なビックロはいかがですか。さあ、みなさん、手をつないで！五月の野原に踊りましょう！…………宴（うたげ）果ててのち耳の底に「地鳴り」のように低鳴しているのは、あれは、「インターナショナル」のどよめきです。

八 救 対 通 信

さて、分離公判も全面展開である。七月まで粉碎日程表はビツシリつまつてある。これを完全に粉碎しきるか、ということは我々外部の斗いとともに、獄中諸君の実力斗争に大きくよっている、ということを銘記してほしい。

獄中の同志諸君、欠席裁判の出現により既に感じている人々もあろうが、統一公判獲得斗争は、我々の強固な團結と斗いによつてその質を転化しようとしている。地裁の権力的対応ぶりは、我々が東大斗争において大河内・加藤のそれに見い出したものとなんと似ていてことか。ブルジョア法に則つてさえ正当な統一公判を地裁は認めようとしている。七項目要求斗争といふ東大斗争における一段階が現在、欠席裁判強行といふことで、裁判斗争においては終りをつけようとしているのではないかろうか。東京帝国主義大学解体、全学パリケード封鎖というスローガンで象徴される斗い、個別改良斗争から個別権力斗争へと斗いが進展したように、東大斗争裁判斗争においても東大全共斗がきりひらいた斗いの道は同じコースをたどろうとしているのだ。まさに東大全共斗が撒いた種子は、撒いたもの自身の内に育ちつつあるのである。学友諸君、出廷拒否を貫徹せよ。分離公判を断乎粉碎せよ。東大斗争がきりひらいた地平を裁判斗争においても展開せよ。欠席裁判を敵が強行しようとするなら、徹底的にそうさせるがいい。敵はもはや退路を断たれるのであるから。

※ 漢中の同志諸君、六月五日欠席裁判が強行されたことを知つてのことと思う。諸君は我々の分離公判粉碎・統一公判獲得斗争がもはや敗北したのだ、と思つてゐるであらうかの断じて否である。諸君らの全面的出廷拒否、法廷における粉碎斗争、そして地裁をとりまくデモにより分離公判は次々と粉碎されいくことによりなすすべをなくした地裁が、最後にうつた手が欠席裁判なのである。われわれの斗い、とりわけ獄中の諸君の斗いが、地裁を欠席裁判といふ階級性そのものを全面に押し出した裁判をせざるをえないように、追いつめたのである。同志諸君、敵は窮地に陥つたのである。欠席裁判しかやりようがないとなつてしまつたのだ、それならば徹底的に欠席裁判（階級裁判）をやらせようではないか。全法廷を出廷拒否で貫徹することで、被告人、弁護人なしで判決をいいわたさせようではないか。それこそ裁判所が、そして権力が最も恐れていることだから。

注……※印が救対通信の始めの原稿になります。

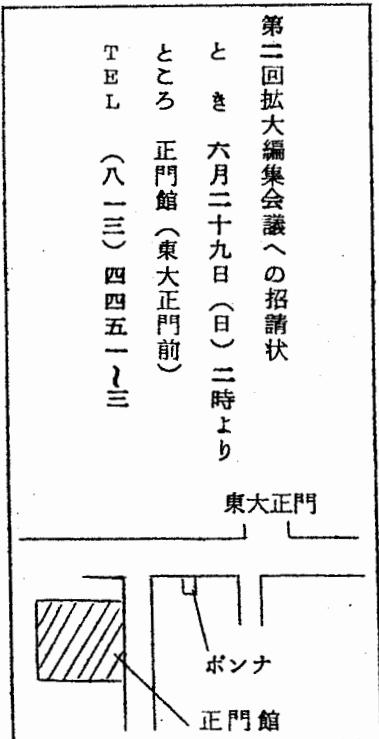
第二回拡大編集会議への招請状

とき 六月二十九日（日）二時より

東大正門

ところ 正門館（東大正門前）

TEL （八一三）四四五一七三



八編集後記▽

お 知 ら せ

☆ 厳密に云えば、「ことば」によつて人間をパクリ動かすことがでないと斗争宣言した、我々は言語物神論者か。否、断じて否。我々は知つてゐる。運動との緊張関係のみが人を動かすのだと。

パクルとは革命本隊の周りを囲み、支持し、時には行動をともにする広範な人民……後衛部隊を対象としているのだ。

☆ ぼくは一人の女の子を好きになつてしまつた。水上二十六号氏によればやはり「帝国臣民」として「体制とべとべ」と「野合」してきた「家」「母」の残像であるかもしけない。「帝國臣民に弔鐘を」……

しかし彼女は非常に健康な感性と自由奔放さと可愛いらしさをもつてゐる。「きれいな女の子を愛している」「ぼくを敵だとは絶対に云わせない。

☆ 六・十五、あの日以来、ぼくが中学三年生であり権さんが殺されて以来十度目の六・十五、一九七〇年安保につながらる六・十五がまたきてしまつた。六・十五を斗つてこそ七十年安保が標的として定まるところを考える、ぼくは六・十五を斗い抜く。不幸にして獄中書簡に投稿することになるかもしれないという予感をひだきつつ。

(影丸)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

獄中で斗う同志との公開文通の場として、毎週一回発刊の予定です。今回掲載の手紙に対する感想・返事などがありましたら、真崎宛にお送り下さい。
なお、獄中同志からのお手紙をお持ちの方は連絡して下さい。

第一版	六月十四日	印刷発行
発行者	「獄中書簡」発刊委員会	
委員長代行	加藤二郎	
△連絡先	文京区向丘1の12の7	
東大追分寮内	811二三六八	
真崎猛哲		

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆